

カジカ・ウツセミカジカ（カジカ科）



写真（上）：カジカ。

学名と大きさ：

カジカ, *Cottus pollux*, 15 cm

ウツセミカジカ, *C. reinii*, 17 cm

特徴：カジカ、ウツセミカジカともに頭が大きく、口も大きい。胸びれの軟条数はカジカが12～14本で、ウツセミカジカは13～17本。両種は、胸びれ軟条数の他に、明瞭な暗色帯が頭部にあるか否か（カジカにはなく、ウツセミカジカには眼から鰓蓋に向かって2本ある）などで区別できる。

国内の分布：カジカは本州と四国および九州北西部に分布。ウツセミカジカは日本海側の北海道南部から九州北西部および四国に分布する。

県内の分布：カジカは、那珂川水系、久慈川水系、県北地方の各河川などに分布。久慈川支流でよくみられるが、なかでも二次支流や三次支流に多い。聞き取り情報などからは県北地域の河川のほとんどに生息していたと思われるが、2006～2010年に行った調査では数河川でしか確認できなかった（山口、未発表）。霞ヶ浦・北浦やその流入



写真：ウツセミカジカ。

河川では、採捕記録はあるが非常にまれ。

ウツセミカジカは、那珂川水系や久慈川水系、県北地方の各河川に分布する。

県内での生態：カジカの産卵期は3月下旬～4月頃で、河川の上流域の石裏などで産卵する。稚魚は水生昆虫などを食べて成長する。

一方のウツセミカジカは、1～3月頃に河川下流域の転石下にオスが産卵床を構え、複数のメスを巣穴に呼び込んで産卵を行う（写真1）。オスは卵がふ化するまで卵を守っている。ふ化仔魚は直ちに海に降る。4月頃になると全長2 cmほどの稚魚が河川を遡上してくる。その頃の稚魚は河口域や下流域でよくみられる。

備考：カジカは環境省のレッドリストの準絶滅危惧に、ウツセミカジカは絶滅危惧 I B 類に選定され、さらに茨城県版レッドデータブックではウツセミカジカが希少種に選定されている。ただしウツセミカジカに関しては、2006～2010 年に行った調査によれば久慈川以北のほとんどの河川で採集され、生息数も多いようであった（山口，未発表）。レッドデータブック作成当時に比べて本種の資源水準は高くなっているのかもしれない。なお、カジカはカジカ大卵型や河川陸封型と、ウツセミカジカはカジカ小卵型と呼ばれることも多い。

茨城県内水面水産試験場では、平成 3 年度（1991 年 4 月）からウツセミカジカとカジカの種苗生産研究に取り組み、平成 11 年度（2000 年 3 月）には両種ともに種苗生産技術を開発することに成功している。平成 12 年度（2000 年 4 月）からは実際にウツセミカジカの種苗分譲を行った（平成 22 年度で終了）。カジカについては、技術は開発できたが、卵数がウツセミカジカの 3 分の 1 と少なく、生産効率の問題などから分譲は行わなかった。ちなみに重量 15 g の親魚の卵数は、ウツセミカジカで 600 粒程度、カジカで 200 粒程度であり、この違いは両種で卵の大きさが大きく異なるためによる（ウツセミカジカの卵径は約 1.6 mm、カジカは約 3.0 mm）。種苗生産現場においてウツセミカジカは、3 月に孵化した仔魚が 9 月には平均 0.5 g、さらに 1 年後には平均 15 g に成長する。生産されたウツセミカジカは、唐揚げや塩焼き、骨酒などいろいろな料理方法で食されるが、商品サイズとしては 8 g 以上の魚が使われる。その出荷サ

イズになるには、ふ化後ほぼ 1 年を要する。

ウツセミカジカはカジカに比べ卵数が多く種苗生産に有利な点はある。しかし、ふ化から 1 ヶ月程度は塩分 3 % に調整した人工海水（海水と同程度の塩水）で飼育し、さらに 1 ヶ月をかけて徐々に塩分濃度を下げ、稚魚を淡水に馴らしてから飼育を継続する必要がある。そのため人工海水のコストが課題になってくる。この点、カジカは一生淡水域で生活することから飼育に必要なのは淡水のみであり、種苗の生産コストは抑えられる。

主な文献：

茨城県内水面水産試験場（2011）茨城県におけるカジカ養殖マニュアル。

中村 誠・杉浦仁治（2001）瀬沼産魚類の追加。茨城内水試調査研究報告, 36: 36-40.



写真 1: ウツセミカジカの卵塊（上）と育った種苗。